

第4章 竹田城下町の概要

1 町並みの変遷

竹田の町は、竹田城築城とともに、主に城普請で集まった職人が住み着いたことから始まり城下町として発展した。廃城後は播但道・山陰道の接点にあり、交通の要衝として重要な立地を活かし、宿場町へと変化した。

西背後には竹田城跡のある古城山があり、町はその東側山麓に広がる円山川の氾濫原に立地する。古城山からは、西・北東・南東に主尾根が派生し、このうち北東及び南西尾根は、城下町の南及び北に向って延びており、この古城山と円山川によって、町は完全に取り込まれている。

竹田の町は、記録に残るだけでも過去に3回の大災害を経験し、記録・資料も多く消失したことから、町並みの成り立ちの正確な裏付けを難しくしている。



竹田城跡と城下町

慶長から明治末期までの約300年にわたる主な災害を以下に示す。

慶長の災害	<ul style="list-style-type: none">・慶長15年(1610)2月11日 丑の刻出火、戸数1,300戸が全焼。・慶長16年(1611)5月、円山川が洪水となり、城の麓の堤防が決壊し、金梨山麓の城下町を流し去り、これまで古城山の麓を流れていた河川が流れを変えて金梨山の麓に移り、それまで町であったところが川になり、竹田の城下町は完全に消滅した。
宝暦の災害	<ul style="list-style-type: none">・宝暦2年(1752)7月 大雨洪水で円山川が溢れ、各所で堤防が決壊し、田畑の多くが冠水した。・宝暦7年(1757)8月20日 大雨で洪水となる。・宝暦12年(1762)3月3日 出火、強風により130戸余りが全焼。
明治の災害	<ul style="list-style-type: none">・明治10年(1877)4月29日 「新町ヨリ出火、内町、中町、上殿、上下裏町、河原町迄丸焼、南大風ノ処西風に相成、太田氏ヨリ残ル、午後7時半頃出火」・明治22年(1889)大洪水。8月19日～9月11日まで連日雨が続き、新町堤防が決壊し、竹田は全て浸水。浸水家屋500戸(?)、流出家屋33戸、田畑・橋梁の流出は数知れず。竹田有史以来の大洪水となる。・明治23年(1890)9月 大雨により河川が瀑漲し、新町を浸す。・明治25年(1892)3月 朝来山の山腹が忽然として湯気を発する。後10日にして止む。

2 竹田城下町の構造

道路及び水路は、町を形成する上における骨組みであり、城下町の主要部分（居館・家臣団屋敷）、内郭、外郭の区分を考える上でも重要な要素である。

（1）道路

竹田の町は、概ね南北方向に長く延び、その中を南北に貫通する生野街道を取り込んで、幹線道路としている。この幹線道路に並行して南北方向の支道が2～3本設定されて、それらを東西方向の道路によって結んでいる。それぞれの道路の交差点はT字路が主体で、要所にクランク状の折れや、鈍角的な折れを配する点は、城下町の防御性をとどめた要素といえるかもしれない。



幹線道路



幹線道路のクランク状の折れ

現在残る竹田の町並みのほとんどは、江戸時代になって形成されたもので、城下町の形態が残っている箇所はJR竹田駅北側の寺町近辺と考えられる。寺町を形成する寺院は江戸時代以降に移転したもので、古城山の東山麓にあたる位置や、竹田城主赤松氏の居館推定地に接することから、家臣屋敷などがあった場所と考えられる。また周辺の地割がほかの町並と主軸を異にする点も、城下町の痕跡が遺存したことをうかがわせる。

（2）水路による区画設定

竹田の町を流れる水路は、新町の南の外れから円山川の水を取り込み、内垣内との境を流れる。上町との接点となる金比羅神社辺りで二方向に分かれ、上町・中町・観音町を包囲するように進み、観音町の北東隅で合流し、下町から円山川に流れる。

この水路によって竹田城下町の構造を推定すると、現在の寺町周辺の居館区域を中心に、上町から観音町にかけての内郭区域、町屋と推定される下町の北外郭区域、および新町の南外郭区域の4箇所分割できる。この水路は、地元では『絹屋溝』と呼ばれ、文政7年(1824)に町内の防火用水の確保などを目的に造られたとされている。しかしこの水路は、近世においても町を機能的に分割する重要な役割を果たしており、江戸時代になって新設されたものではなく、城下町の時期に形成された水路を改修したものと考えられる。



寺町の水路



殿町の水路



観音町の水路

(3) 寺院・神社

寺院・神社の配置は、祭礼・信仰の場だけでなく、城下町の防備施設としての側面を引き継いだ可能性もあり、城下町の構造を把握する上でも重要である。

現在竹田町内には以下の6つの寺院があるが、これらは創建時の位置でなく、竹田城廃城後に移動したものである。

また竹田城との関連がうかがえる神社には、表米神社及び諏訪神社がある。

【寺院】

名称	概要
ほうじゆ 法樹寺	天正6年(1578)竹田河原町に創建。慶長11年(1606)赤松の居館(現在地)に移る。境内の裏手には、赤松広秀の供養塔が祀られている。
しょうけん 勝賢寺	天正5年(1577)金梨山迫間村口に創建。寛文年間(1661~1672)現在地に移る。
じょうこう 常光寺	文禄3年(1594)創建。創建地不明。慶長15年(1610)現在地へ。初代城主と伝えられている太田垣光景の墓標と伝える供養塔がある。
ぜんしょう 善證寺	暦応3年(1340)金梨山山麓に創建。寛永2年(1625)現在地へ。
かんのん 観音寺	創建地は観音町(創建時期不明)。天正年間(1573~1591)現在地へ。
みょうせん 妙泉寺	永正年間(1504~1520)加都村茨垣にて創建。寛永年間(1624~1643)現在地へ。

【神社】

名称	概要
表米神社	天正巳年、加納丘に創建。天正8年(1580)焼亡。その後、竹田と久世田の2箇所に建立。宝永7年(1710)に社殿を造営。 竹田城主の太田垣氏が、祖神とする表米親王(日下部表米)を祀ったと伝えられる。境内には、県指定文化財の相撲棧敷がある。
諏訪神社	嘉吉年間(1441~1443)金梨山山麓に、山名宗全によって創建。現在に至る。

各社寺の創建年代は、全て嘉吉年間から文禄・慶長期にかけてで、城の機能した時期と合致する。創建時期における位置は、法樹寺が河原町、観音寺が観音町、妙泉寺が加都村茨垣、表米神社が加納丘など、城下町の要所や城下町に通じる場所に巧みに配置され、竹田城下町の防御を固めた意図もうかがえる。また創建年代から、少なくとも天正から文禄年間の中に、城下町が形成されたと考えられる。



表米神社の相撲棧敷



表米神社の舞堂

(4) 近世以降の状況

竹田城廃城後は、姫路・生野と和田山から京都を結ぶ街道沿いの宿場町へと変化した。享保3年(1718)の「生野銀山灰吹銀京都銀座渡道中継書上(生野書院蔵)」には竹田町と見え、四里の生野、五里の佐治(現丹波市青垣町)に継立っていた。

享和2年(1802)5月に当地を通った際の記録「菱屋平七長崎紀行(京都大学文学部蔵)」に「竹田宿」とみえ、「瓦葺・板葺打雑りて、町屋十丁余に立つづけり。・・・」とあり、また「西の方の山の上に赤松左兵衛広秀の城跡あり、櫓天主のいしづえ・石垣など高く見ゆ」とも記されている。

江戸時代の竹田町の広がりについて具体的には不明であるが、明治6年(1873)に作成された「但馬国朝来郡第五大区四小区竹田町見取絵図」によれば、現在の下町から新町まで広がり、幕末期には現在の町並みの広がりとも一致していたことがわかる。



但馬国朝来郡第五大区四小区竹田町見取絵図(竹田財産区所蔵)



現在の地図に上の図を重ね合わせたようす

江戸期の竹田を代表する産業に「竹田椀」がある。宝永年間(1704～11)には、工人 150 戸を数え盛行したが、天保年間(1830～44)になると 58 戸に減じ、さらに天保 7 年(1836)の凶作でわずか 6 戸になったという。しかし江戸時代後期の文献においても「竹田椀」の記載が認められ、山陰道と山陽道を結ぶ街道沿い位置した竹田の漆塗りの木椀は、幕末まで世に知られた。また職人たちによって培われた木工技術を背景に、明治時代に至って家具や仏壇などの漆工が盛行し、大正時代以降も存続した。

その他、現在の竹田町に残る主な歴史文化遺産を以下に示す。

名 称	概 要
えびす橋	宝永元年(1704)、若松屋久右衛門が 3 年かけて石材を集め、自費により宝永 5 年(1708)に町屋の街道に架けられたもので、昭和 5 年(1930)に現在地に架け替えられた。
常光寺石橋	「宝永四年(1707)五月」の紀年銘を持つ最も古いもの。
法樹寺石橋	門前堂内の架橋標に、「南無阿弥陀仏 此石橋掛 享保八年八月」とある。
善證寺石橋	境内に保存している石橋の橋標部に、「享保十七年(1732)九月」「但馬城崎郡下之宮村隔夜庄五郎」とある。
勝賢寺石橋	えびす橋と同時代の造立と推定されている。
絹屋溝	竹田町内は洪水などの水はけが悪く、文政 7 年(1824)に上町の絹屋治右衛門が完成させる。途中には水車も設けられ、石段のついた「洗い場」など、生活に欠かせない構造物であった。



えびす橋



常光寺石橋



法樹寺石橋



善證寺石橋



勝賢寺石橋



絹屋溝

3 伝統文化

時代の移り変わりや生活様式の変化によって、いろいろな行事が消えていく中で、竹田地区では、今なお伝統の守られている祭りが続けられている。

<p>たいまつ (松明) 祭り</p>	<p>毎年7月23日の夜、朝来橋下手の円山川河原で、旭町区を中心に催されている。これは宝暦12年(1762)に発生した大火を機に、朝来山に祀る愛宕神社に“たいまつ”を捧げて防火を祈ったことを起源とする。 高さ6m(直径1m)位の大きな“たいまつ”による夏空を焦がす勇壮な火は、華やかでかつ強烈な印象を残す。</p>
<p>地蔵祭り</p>	<p>毎年8月16日の夜、町内7ヶ所にある地蔵さんに香花を捧げ、主として子供の健やかな成長の願いを捧げる。子供たちは金魚すくいや花火など楽しい一夜を過ごす。</p>
<p>秋祭り</p>	<p>“竹田音頭”の一節に「秋は夕陽に紅葉が映えて、衛にや祭りの太鼓がひびくよそじゃ見られる屋台ねり、屋台ねり・・・」 昔は10月17日であったが、その後毎年10月9、10日の両日で行われてきたが、最近では10月第2週の土日に行われている。 過去には諏訪神社の“みこし”の川渡しがあり、表米神社では奉納相撲、それから各町内から繰り出す、大屋台・小屋台、総数21屋台が、掛声勇ましく練り廻る。特に本祭の午後3時には、竹田小学校校庭に集まり練り競い、その後町内夜遅くまで、一大絵巻を繰り広げる。</p>



たいまつ祭り



地蔵さん



秋祭り



秋祭り

4 現在の状況

竹田での近代における最大の変化は、明治39年(1906)の播但鉄道の開業、現在のJR竹田駅の建設があげられる。駅と線路の建設により多くの家屋が移転させられた。切妻平入りの駅舎は、開業当時の姿を踏襲している。

また大正年間までは、旅館、料理屋、茶屋、菓子屋、魚屋、雑貨屋などの商店が軒を並べ、漆器や天保末期(1840～)から続く家具製造を業とする店も多くあったが、現在では、家具・仏壇とともに製造する店がわずかに残る。

近年は竹田城跡への見学者数の増加をきっかけとして、平成22年8月に山城の郷2階に竹田城資料展示コーナーの設置し、平成25年11月には、旧木村酒造場を改修してホテル・レストラン・カフェ・城下交流スポットなどに利用が可能な施設がオープンした。施設内部に情報館「天空の城」が設置され、資料展示室・竹田城シアターなどのガイダンス施設が整備された。

また城跡及び竹田地区への来訪者のため、竹田まちなか観光駐車場や竹田城下町観光駐車場が整備され、天空バスによるパークアンドライド方式を実施した。



JR竹田駅舎



山城の郷



山城の郷内の竹田城資料
展示コーナー



旧木村酒造を改修した施設



情報館「天空の城」内の
展示パネル



天空バス



天空バスを待つ来訪者



竹田まちなか観光駐車場



竹田城下町観光駐車場